

日本行動分析学会ニューズレター J - A B A ニュース

2004年 夏号 No.35 (8月4日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 中野良顯

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学文学部心理学科学習心理学研究室内

FAX:03-3238-3658(日本行動分析学会事務局と明記) URL:http://www.behavior.nime.ac.jp/~behavior/

2004年度前半の活動について	中野良顯
2004年度学会賞について	NL編集部
編集委員会より	眞邊一近
出版企画委員会より	藤田継道
公開シンポジウム企画委員会より	小野浩一
財務担当より	坂上貴之
第2回日本在住学生会員のABA参加に対する助成事業	杉山尚子
ABAに参加して(1) スキナー生誕100周年記念大会で発表する	加藤明子
ABAに参加して(2) ABA体験記	松井 進
行動分析学会第22回年次大会準備委員会より	佐藤方哉
学会情報/常任委員会ヘッドライン	中野良顯
学会情報/会員情報	事務局
編集後記	藤 健一
研修会のお知らせ	藤田継道
ABA北京大会のお知らせ	

2004年度前半の活動について

理事長 中野 良顯

2003年にスタートした私たちの理事会は、今年で2年目の夏を迎えました。初年度に計画した主な事業は、第21回年次大会の開催、公開講座、機関誌第17、18巻の発行、J-ABA ニュース No.31-34の発行、学会賞第1回受賞者の決定などでしたが、公開講座を除いてはほぼ計画通りに遂行することができました。年次大会は長谷川実行委員長の指揮のもとで岡山大学において盛大に行われ、機関誌の発行は眞邊委員長の格別のご努力によってほぼ定期的に発行できるところまで回復するとともに、ニューズ・レター

は藤新委員長のお力で年4回発行することができました。第1回論文賞も、望月要、佐藤方哉両氏に、第1回実践賞を高畑庄蔵氏に決定することができました。

また今期3年間は、理事会の中に9つのタスク・フォースを設けて、20人の理事の先生方全員にいずれかに加わっていただき、作業部会ごとに年次目標を設定して活動していただき、年度末には目標達成の度合いを査定していただくようお願いしております。各作業部会はいま2年目の年次目標を設定して、それぞれ勢力的に

活動していただいております。

アカウントビリティということばを辞書で引いてみますと、企業の場合は「トップが資金管理責任履行を客観的手段で説明する責任」のことであり、教育の場合は「生徒の成績によって学校の資金や教師の給料を左右するという形での成績責任」のことであり、と説明されています。私たち理事会も会員の皆様に対してアカウントブルな組織でありたいと願っております。これらの詳細については、9月の年次大会において行われる会務総会においてご報告させていただきます予定です。

スキナー生誕百年記念ボストン ABA 大会

5月28日から6月1日まで、シェラトン・ボストン・ホテルで、国際行動分析学会第30回年次大会が開催されました。今年は30カ国から3800人が参加したそうですが、うち13人は上智大学の11人の学生と私たちでした。今大会はボストンの地でスキナー生誕百年を祝う特別の会でしたが、私たちにとっては恩師のロヴァス先生が「マス・メディア貢献賞」(Award for Effective Presentation of Behavior Analysis in the Mass Media)を受賞されたため、とりわけ心に残る大会となりました。

ロヴァス先生は受賞講演において、ワシントン大学時代にビジュとベアーによって、いかに巧みに精神分析派から行動分析派へとシェーピングされていったかということと、現在の応



用行動分析が直面している問題とを例によって時間を無視してユーモアたっぷりに話されました。会場は爆笑に次ぐ爆笑となりましたが、話された内容は「ドン・ベアー: 明るい未来への道を拓く」(行動分析学研究 17 巻 1 号、68-75)の記述とほぼ重なるものでした。

翌30日夜7時から、ロヴァス先生による特別ワークショップ「自閉症に対する早期高密度行動介入」が企画されました。ワークショップではUCLA-YAPのこれまでの研究の流れと、新しいデータの提示が行われ、2時間という時間を忘れるほど楽しく学習させていただきました。途中で山本崇博君と私が自閉症児とその父親役として壇上に引っ張り出され、ロールプレーを演じさせられました。写真はワークショップ終了後に会場で先生を囲んで撮ったものです。手にされているのは日本のうちわで、私たちがお祝いのことばを寄せ書きして差し上げました。

私たちは今年もポスター発表をしましたが、そのほかにインターナショナル・ペーパー・セッションでアンディ・ボンディのPECSについての講義の通訳をしました。事前に翻訳しておいたパワー・ポイントを日本から持参したノート・パソコンを使って提示して、50分のプレゼンテーションをしました。講義が進むに連れてだんだん二人の息が合うようになり、楽しく仕事をすることができました。

私たちはもう一つ「学齢児の望ましい行動を増やすためのソーシャルスキル訓練とセルフマネジメントの活用」というインターナシヨナ



ル・シンポジウムを企画しました。オハイオ州立大学のピーターソン教授と相談して、アメリカ側の発表者は日本語のパワー・ポイントを提示して英語で口頭発表し、日本側の発表者は英語のパワー・ポイントを提示して日本語で発表するという形で申し込みをしてみました。日本語やスペイン語への通訳つきセッションからヒントを得たものであり、一年がかりで取り組んだものでした。通訳つきセッションだと一方的ですが、ジョイント・シンポジウムでは双方の発表者がデータを出し合い、母語を生かしながら双方向的にディスカッションできます。結果的には日本側の発表者が英語での発表に挑戦したので、当初の企画通りには展開しませんでした。発表申し込みの段階で日本語の発表でもよいとしたことは、日本側の参加者の気持ちをずいぶん楽にすることができました。通訳つきセッションでは一方的にサービスされているようで気が引けるのですが、このような方式にすれば対等に議論することができるので、事前の準備には時間がかかりますが、伸び伸びと参加できるのではないかと思います。ABA 関係者が今後われわれの初めての試みを生かしてくれるといいと思っています。

2004 年世界行動療法認知療法会議

7月20日から24日まで、神戸の国際会議場で2004年世界行動療法認知療法会議(WCBCT2004)が開かれました。これは日本行動療法学会、日本認知療法学会、日本行動分析学会の3学会が中心となって組織委員会を作り、アジア組織委員会と共同して3年がかりで実現したものです。このうち行動療法学会と認知療法学会は、このWCBCT2004に合わせて、それぞれの学会に関連するテーマで招待講演やシンポジウムなどを開催しています。そうした招待講演やシンポジウムなどを合計すると、WCBCT全体としては約30のワークショップ、21の招待講演、28のシンポジウム、70の口頭発表、277

のポスター発表が行われたこととなります。そして国際会議への参加者は約1400名、ワークショップへの参加者は延べ2000名に達しました。

この国際会議開催への協力は、小野浩一前理事長がお引き受けしたものであり、私は理事長交代に伴って途中からこの計画に参加してきました。学会としては2003年度の事業計画に予算の裏づけを伴う事業としては掲げていませんでしたが、科研費の申請をしたり招待講演候補者に依頼状を書いたりするなど、多少のお手伝いはしてまいりました。私はこの会議に最初の二日間だけ参加いたしました。

初日はまず1日ワークショップに出て通訳を務めました。「行動主義に基づく自閉症児の治療」というワークショップで、ノルウエーの若い友人スヴェン・アイカセツ教授が発表してくれました。スヴェインはノルウエー語の処理できるパソコンを持ってきました。それでパワー・ポイントの中の動画を提示することにしました。私は彼のパワー・ポイントの日本語版を直前に作り、それを私のパソコンから提示することにしました。6時間の間、主に日本語版のパワー・ポイントを提示し、ときどきノルウエー版から動画を提示して、わかりやすく講義してくれました。スヴェインはノルウエーなまりの早口の英語で話すので、ゆっくり話すようにあらかじめ釘を刺しておいたのですが、やはりすぐ早口になりました。通訳の仕事は私にとっては「呆け度テスト」「老人度テスト」のようなものでした。実際には通訳というよりも、二人でその場で文章を創作するというような形で展開しました。講義では初歩のプログラムとして、非音声模倣、簡単な教示の理解、マッチング、言語の理解、音声模倣、表現言語、遊びの指導が取り上げられ、ノルウエーの子どもたちの映像がたくさん提示され、指導の具体的な技法の提示と背景にある行動の原理の解説がほどよく行われました。とくに条件性弁別訓練、偶発教授、般化と維持、ログ・ブックによるデータの収集方法などは、豊かな臨床経験の裏づけなし

には語れない中身の濃い話でした。国際会議のワークショップ担当の丹野義彦教授がこのワークショップの出版を企画しています。いずれみなさんに詳細をお伝えすることができることになるでしょう。

初日の午後 5 時から開会式が行われ、組織委員長の高山巖教授、世界会議委員長のアーサー・ネズ教授、井戸兵庫県知事、矢田神戸市長などが挨拶しました。主催 3 団体の理事長も挨拶を求められました。私の挨拶は以下の通りです。

「主催団体の一つである日本行動分析学会を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。まず、2004 年世界会議を日本において開催するために、アジア組織委員会のリーダーとして、つねに先頭を切ってプロジェクトを推進してこられた日本行動療法学会のみなさまに、心から厚く御礼申し上げます。

日本行動分析学会は、行動主義の臨床研究と実践に取り組む“きょうだい団体”として、日本認知療法学会とともに、仲間入りをさせていただきました。そのような機会を与えて下さった友情とフェアプレーの精神に、重ねて深く感謝申し上げます。

さて、この会議では“グローバル・スタンダードをめざして”を目標に掲げました。グローバル・スタンダードとは何か、それを実現させるための道筋には何が待ち受けているか。そのことを考えてみました。

日本に生まれ、日本で育った私が、欧米で発達した行動療法や行動分析を学ぶとき、壁としてぶつかるのは、外国語とくに英語と、それを操る人々のものの考え方です。

私は 30 歳過ぎまで、来談者中心療法を信奉していました。初めは翻訳書を頼りに勉強する。やがて翻訳者の枠組みから自由になって、ロジャーズ自身の原文から、その真意を理解したいと思うようになる。ロジャーズから私が学んだことは、カウンセリングの枠組みと、そして彼が格闘していた“臨床の科学化”という課題で

した。グローバル・スタンダードと科学哲学との間には、切っても切れない関係があります。

“サイエンスとは何か？”“人間としての側面の情から生まれた、ヒューマン・サービス専門職を、サイエンスというグローバル・スタンダードによって整合させようとするとき、私たちにどんな問題が起こるか？”ロジャーズが 1950 年代に格闘していた問題は、昔のサイエンティスト・プラクティショナー・モデルから、現代のエヴィデンス・ベースト・トリートメントに至るまで、長い間この領域で追求されてきた、“科学とヒューマニズム”の結合という普遍的な問題でした。そのことを発見したとき、私は世界に解き放たれた開放感と、普遍的なものごとを考えることの喜びを実感することができました。

しかし当時の私の臨床には、焦点というものがありませんでした。30 代になってやっと自閉症の子どもたちに出会い、自閉症の子どもたちの支援の仕事を自分の生活にすることによって、焦点が定まりました。

そしてまたもや、英語という壁にぶつかったのです。イヴァー・ロヴァスの“精神障害児の模倣言語の獲得”も、モントローズ・ウォルフの“自閉症児の問題行動へのオペラント条件づけの適用”も、ドナルド・ベアらの“応用行動分析の現在のいくつかの次元”も、どれも日本語では読むことができない。図書館に行って論文を探す。自分の大学にはそのジャーナルがないことを知る。やっと論文を手に入れ、喜び勇んで全訳して清書する。コピーを作り、仲間と輪読して、一字一句理解しようとする。そうして判ったことは、日本の自閉症児も、アメリカの自閉症児も同じ行動を示すこと、アメリカの自閉症児の行動を劇的に改善させたオペラント条件づけと行動分析は、日本の自閉症の子どもたちの支援にもそのまま役立つサイエンスとテクノロジーであること、でした。人間にはローカルな文化を超えて普遍性が存在すること、サイエンスはローカルな文化を超えて人々を結び

Table 1. Scientific Evidence of ABA Studies

Level of evidence	Reference	Program
1	Smith et al., 2000	UCLA model for 25 hours per week of 1:1 for 1 year and gradually reducing hours over the next 1-2 years (experiment, n=15), 3-6 months of parent training (control, n=15).
2	Eikeseth et al., 2002	UCLA model for 28 hours per week of 1:1 for one year (experiment, n=13), 29 hours per week for one year of 1:1 special education (comparison, n=12).
2	Lovaas, 1987; McEachin et al., 1993	UCLA model for 40 hours per week of 1:1 for a minimum of two years (experiment, n=19), less than 10 hours per week of UCLA ABA model (comparison 1, n=19), local service group (comparison 2, n=21).
3	Andersen et al., 1987	UCLA model for 15-25 hours per week for 2 years (n=14)
3	Birnbrauer & Leach, 1993	UCLA model for 18 hours per week for 2 years (n=9). Comparison with children not qualifying for study (n=?)
3	Eldevik et al., in press	UCLA model for 12.5 hours per week for 21 months (experiment, n=13), 12 hours per week for one year of 1:1 special education (comparison, n=15) for 21 months
3	Scheinkopf & Siegel 1998	Parent managed intervention based on UCLA model for 12-43 hours per week of 1:1 treatment for 20 months (experiment, n=11) and CA and MA matched local service group (comparison, n=11)
3	Smith et al., 2000	Parent managed intervention based on UCLA model for 25-30 hours per week of 1:1 treatment for at least one year
3	Weiss, 1999	UCLA model for 2 years (n=20)
NSV	Bibby et al., 2002	ABA. Parent managed intervention based on UCLA model for unspecified number or hours per week of 1:1 treatment for at 2 years and 6 months.
NSV	Handelman et al., 1991	Children working in self-contained (n=unspecified) or integrated classrooms (n=unspecified) for 11 months.
NSV	Harris et al., 1990	Children working in self-contained (n=5) or integrated classrooms (n=5) for 11 months.
NSV	Harris et al., 1991	Children working in self-contained (n=unspecified) or integrated classrooms (n=unspecified) for 11 months.
NSV	Hoyson et al., 1984	15 hours per week of intervention in class of typically developing children (n=6; Bredkamp, 1977; Strain & Cordisco, 1994). Some 1:1 treatment.
NSV	Luiselli et al., 2000	UCLA model for 14 hours per week for 9 months (n=16)

つける思考の体系であること、でした。そのことはその後フルブライト基金の助けによって UCLA に留学し、ロヴァス教授の自閉症臨床の研究に参加することによって、じかに確かめることができました。

グローバル・スタンダードを実現する道筋とは何でしょうか？私はこう考えます。第一に、自分の臨床の焦点をしぼって、その領域の主要な問題を解決するために継続して取り組むこと。そのことによって世界の仲間に語るべきデータを蓄積すること。第二に、内外のサイエンスの情報にできるだけ通暁すること。しかしこのことは、アジア人とりわけ日本人にとっては、外国語という壁に挑戦し続けることを意味します。

第三に、多くの図書館が、重要なジャーナルの講読に惜しみなく予算を投入すること。読みたいときに論文が手に入る環境、論文を入手して読む行動が“即時強化”される制度を確立することです。そして最後に、同じ領域で仕事をしている内外の人々と積極的に交流すること。

2004年世界行動療法認知療法会議は、まさにアジアにおいてこのことを実現するための壮大な試みであります。この国際会議が、世界から、アジアから、そして日本から参加された、すべての人々にとって、深いレベルで交流することのできる、真に開かれたフォーラムとなることを祈念いたしまして、歓迎のご挨拶とさせていただきます。」

この日の夜 7 時から、国際会議場に隣接するポートピア・ホテルの偕楽の間で盛大な歓迎パーティが行われ、ほとんどの参加者が出席して交流を深めました。舞台ではパーロー教授の挨拶や、徳島県の「ほんま連」の阿波踊りの披露などがありました。海外の参加者も楽しそうに踊っていました。

国際会議二日目の 21 日の午前中は、アイカセツ教授の招待講演がありました。私はその座長を務めました。演題は「自閉症児の早期介入のアウトカム」でした。会場で日本語に訳した配布資料を配りましたが、英語を聞いてその場で理解するにはやや難しい講演内容でした。自閉症の早期介入論文を集めて分析したもので、彼はまず分析対象の候補として次の条件を満たす論文を収集しました。査読付ジャーナルに発表された、アウトカム・データが示されている、受理面接時の子どもの平均年齢が 7 歳以下だった、自閉症児が示す多くの問題に対応する総合的な心理教育的サービスを提供している。次にそれらを科学的証拠の質の度合いによって 4 段階に分類しました。最高度の科学的論文を意味するレベル 1 の条件は、参加児を ICD-10 か DSM- によって診断した、診断は第三者が行ったか、ADI-R, ADOS-G, または CARS などの診断用具が使われた、参加児は無作為抽出された、受理時測定とアウトカムは、少なくとも知的機能と適応機能を測定しており、標準化された査定用具が使われた、IQ 得点は言語コミュニケーションスキルと視空間またはパフォーマンススキルの両方から収集された、

査定は独立の査定者によって行われた、治療忠実度の査定がされているか、治療手続きがマニュアルとして示されている、でした。その結果レベル 1 に該当する論文は 1 本のみ、レベル 2 に該当する論文が 2 本、レベル 3 に該当する論文は 6 本、科学的価値なしは 6 本になりました (Table 1)。詳細は他に譲りますが、この興味深い論文についても、国際会議終了後、翻訳して出版される可能性があります。

それは国際会議直前に、基調講演と招待講演を依頼している先生方に対して、坂野雄二日本行動療法学会理事長と私の連名で、その講演内容を主催 2 学会の機関誌に掲載させて欲しい旨を申し入れてあるからです。日本認知療法学会は、日本学術会議に登録されてまだ 1 年しか経っていません機関誌も発行されていないため、論文掲載は他の 2 学会にお任せするという返事をいただいています。坂野先生と話し合っ、スヴェインの論文は行動分析学研究に掲載する方向で検討したいと思っています。

さて 21 日午後は、パーロー教授による「情緒障害の治療における認知行動療法統合的プロトコール:理論と実践」という招待講演と、坂野雄二座長による学生向けシンポジウム「科学と実践の力をどう磨くか？」に参加しました。パーロー教授の招待講演も素晴らしい内容であり、これは坂野先生との取り合いになる可能性があります。

なお 24 日の閉会式においても一言挨拶することを求められましたが、あいにく別の会合が予定されていたため、残念ながらお断りすることにしました。

日心連の動き

日本心理学諸学会連合(日心連)の 2004 年度第 1 回(通算第 12 回)理事会が、2004 年 7 月 3 日に開かれました。主な報告事項と審議事項を要約してご報告いたします。

1. 日心連の事務局が移転しました。新事務所は早稲田大学文学部織田研究室(〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1 TEL/FAX 03(5286)3563 E-mail odam@waseda.jp 担当 仮澤 木曜午前 10 時から午後 5 時まで)

2. 二つの学会が新規入会しました。日本乳幼児教育学会(田中敏隆理事長、472 人) 日本認知心理学会(太田信夫理事長、540 人)

3. 収支決算の報告がありました。2003 年度収入 347 万円(会費 197 万、繰越金 150 万) 支出 132 万円(会議費・交通費・郵送費) 次年度

繰越金 214 万円。

4. 会則が改正されました。2005 年度から会費と理事定数を変更する。日本行動分析学会は、500 人から 1000 人の学会であるため、会費は一人当たり 50 円、年会費として 37500 円(7500 円の値上がり)となり、理事定数は現行どおり 1 名になりました。委員会の立ち上げ条件を次のように改正する。「委員会の設置は常任理事会が発議し、理事会の了承を求める。また委員会委員は、常任理事会の議を経て、理事長が委嘱する」。

5. 常任理事が交代しました。岩崎康男常任理事が日本生理心理学会の理事長の任期を終了したことに伴い、新井邦二郎日本教育心理学会理事長が常任理事になりました。空席になった監事には、滝口俊子日本心理臨床学会常任理事が就任しました。

6. 日心連において「心理学検定」試験を行うことが決定されました。なお日本心理学会から日心連への「資格認定」の委譲については、日本心理学会から協議を進める旨の回答が得られないため、日心連として速やかに協議に応じるよう申し入れることになりました。

7. 「心理学検定」のための準備委員会を組織することになりました。2004 年 7 月 31 日までに日本行動分析学会からも委員を推薦するよう要請されています。任期は 2005 年 3 月末日です。その後は心理学検定局となり、発展的に解消する予定です。準備委員会の任務は、心理学検定の企画、運営、広報、問題作成、採点、認証等のほか、財政問題への対応を含め、検定実施のための準備を進めることです。日心連の理事は自学会の会員の中から何人でも推薦することができます。

2004年度学会賞について(第3報)

NL 編集部

現在、学会では 2004 年度の日本行動分析学会「学会賞(論文賞)」と「学会賞(実践賞)」の選考を進めております。「学会賞(論文賞)」と「学会賞(実践賞)」ともに選考委員の選出をはじめ資料の発送などの手順を経て、選考委員による投票が、さる 7 月

16 日に締め切られました。受賞者の決定は、来る 8 月 22 日の常任理事会において行なわれます。論文賞と実践賞の受賞者には、9 月 4 日、5 日の第 22 回年次大会におきまして授賞講演をしていただく予定です。

編集委員会より

行動分析学研究編集委員長 眞邊 一近

7 月初旬に行動分析学研究 18 巻第 2 号が発刊されました。現在の編集委員による発刊は 2 冊目になるわけですが、3 ヶ月ほどずれ込んでしまい当初掲げていた年 2 冊という目標は残念な

がら達成されませんでした。この紙面をお借りして会員の皆様にお詫びします。

本年度は、19 巻 1 号と 2 号の発行を予定していますが、1 号はアクションエディター中島委

員による倫理特集号、2号は一般論文の発行を予定しています。今年度中にぜひとも年2冊の発行に復帰すべく、全力をつくしてまいります。

年2冊の発行に加えて、今期の目標として、執筆規定・投稿の手引きの見直しを考えています。現在の行動分析学研究の執筆・投稿規程は、書式の基準としていたアメリカ心理学会（APA）のAPAマニュアル（<http://www.apastyle.org/>参照）と若干ずれが出てきています。また、インターネットの情報の記載方法などの追加も必要かと考えています。さらには、e-mailでの投稿・査読を試験的に行ってきましたが、問題なく順調に行われていることから、正規の手続きとして組み込むことも検討課題です。

これらの検討課題についての皆様のご意見をお寄せください。お待ちしております。

（投稿を予定されている会員の皆様へのお願い）

論文投稿規程には、電子ファイル（TextファイルあるいはWordファイル）の提出を要件に加えていませんが、迅速な査読を行うため、ご投稿いただく場合は、印刷された論文にFDあるいはCDに記録された電子ファイルを添えてください。また、可能ならe-mailでも添付ファイルとしてお送りください。もし難しい場合は、従来通り印刷した原稿をお送りください。編集部で電子化します。

出版企画委員会より

普及書「行動分析学入門(仮称)」出版計画の進行状況について

普及書刊行委員会委員長 藤田 継道

会員の皆様、お元気でいらっしゃいますでしょうか？ お伺い申し上げます。

さて、先のニューズレターでご紹介しました、アンケート調査で得られた結果に基づいて、会員の皆様のご希望の多かった内容のうち、この企画に取り上げるべき内容とご執筆頂ける内容について、歴代の理事長（初代山口薫先生、第二代佐藤方哉先生、第三代河嶋孝先生、第四代小林重雄先生、第五代小野浩一先生、第六代現中野良顯先生）および、常任理事の先生方に電子メールでご意見をお聞きしているところです。

現時点でメールのお返事をいただくことができたのは初代理事長の山口薫先生です。

山口先生からのお返事は以下の通りです。

「お元気で何よりです。私も4月から星槎大学の学長になり、忙しくしていますが、もう少し

頑張ろうと思います。佐藤先生が執筆されるなら私も何か書かせてもらってもと思います。学会で講演したような内容を整理したものでしょうか？

精神分析、認知論の批判を分かりやすく書いてくださる人があればと思います。

山口 薫」

これに対して、私から次のお返事をいたしました。

「・・・(前略)・・・佐藤先生にもご執筆頂けると思っています。精神分析学、認知論批判は本学会にメリットがあるかどうか、検討させてください。臨床心理士養成校の教員である私としては、精神分析学を批判することで指定校取り消しになる危険性があります。そうすると学生が集まらなくなるので大問題です。批判では

なく、行動分析学で十分説明できるという書き方だと角が立たなくていいような気がします。この辺の内容について書いてくださる方は河合伊六先生がふさわしいのではないかという気がします。……。

早いお返事ありがとうございました。お礼申し上げます。

また、あらためてお願いをすることになると思

いますが、その節はどうぞよろしくお願い申し上げます。……(後略)……藤田継道」

多忙を極めていますが、9月の学会の折には何らかの形で会員の皆様に「普及書の内容」の概要(章立て、節立て、執筆者交渉中)くらいはお知らせできるのではないかと考えています。

今しばらくお待ちください。

公開シンポジウム企画委員会より

自主公開講座ガイドラインについて

担当常任理事 小野 浩一

1. 自主公開講座の趣旨

自主公開講座は、基礎、応用を問わず、行動分析学の普及、学会員の拡大、そして行動分析学の理念や方法を取り入れた実践活動の援助のために開催され、特定の個人や団体の営利を目的としないものとする。

2. 学会との連携内容

自主公開講座は、正会員からの申請によって、学会からの資金的援助、学会の広報手段(ホームページやニュースレターなど)の利用ができる。そして、それらの広報や会場において「日本行動分析学会協賛」を記載する。

3. 開催の申請

1) 自主公開講座の申請は、申請時に日本行動分析学会の正会員であり、講座開催の責任者が行う。

2) 申請時期は、資金援助を必要とする場合には、原則的に当該年度の前期中に行うものとする。

る。

3) 申請に際しては、企画責任者、講座タイトル、内容の概要、発表者、場所、期日と時間、予算概要(会費設定、謝金など)、他学会や団体また各種ファンドなどの提携の有無、について記述する。

4. 自主公開講座の援助額

原則として1件につき5万円以下とするが、申請時にその金額を申請することとする。

5. 公開講座の審査

自主公開講座の申請については、直近の常任理事会によって、1.の原則に挙げた基準によって審査し、採否と援助金額が決定されるものとする。

6. 報告

開催後に、会計報告ならびに講座の詳細報告を行うものとする。

自主公開講座申請書

年 月 日

日本行動分析学会理事長殿

申請（開催）責任者：

印

所属機関名：

1. 開催責任者（日本行動分析学会正会員であること）：

2. 講座タイトル：

3. 開催日時：

4. 開催場所：

5. 予想参加人数：

6. 内容の概要および講演者・発表者：

7. 希望補助金額： 円（最大 50,000 円）

8. 他学会・団体あるいはその他助成金の有無：

なし / あり（具体的に： ）

9. 予算概要

収入		支出	
参加費	¥	会場費	¥
公開講座補助費	¥	人件費	¥
その他助成金	¥	講師謝礼費	¥
その他	¥	その他	¥
	¥		¥
合計	¥	合計	¥

事務局記入項目

受付日： 年 月 日 / 決定日： 年 月 日 / 採用・不採用

財務担当より

日本行動分析学会 2003 年度決算報告

財務担当常任理事 坂上 貴之

一般会計			支出の部		
収入の部			科目		
科目	予算額	決算額	科目	予算額	決算額
前年度繰越金	3,276,108	3,276,108	事務局費		
年度会費			事務局員給料	360,000	360,000
正会員			消耗品費	100,000	29,948
一般	2,909,550	2,996,000	コピー代	50,000	9,800
学生会員	350,200	404,000	通信費	220,000	146,868
夫婦会員	32,000	20,000	会費納入案内郵送費	48,000	50,170
購読会員	328,000	371,800	印刷費		
賛助会員	10,000	10,000	学会誌印刷費	3,000,000	2,223,262
過年度会費			ニューズレター印刷費	50,000	42,954
正会員			封筒印刷費	250,000	187,950
一般	132,300	280,000	パンフレット印刷費	60,000	84,000
学生会員	19,200	16,000	刊行物郵送費		
夫婦会員	8,000	8,000	学会誌郵送費	173,400	166,200
購読会員	8,000	40,000	ニューズレター郵送費	216,000	202,660
学会誌販売	30,000	145,000	学会事業補助費		
広告代	30,000	0	公開講座補助費	300,000	0
特別会計1より	569,601	569,601	2004年度大会補助費	200,000	200,000
コピーサービス		1,170	学会賞関連費	100,000	100,000
著作権使用料		39,978	編集委員会費		
抜き刷り代		166,000	編集作業費	150,000	9,010
利息		5	英文校閲費	100,000	75,000
和文・英文抄録許諾料		5,460	会議費		
大会発表論文集販売		8,000	年次大会会議費	30,000	27,923
予備収入		16,389	その他の会議費	80,000	72,990
			常任理事旅費	300,000	309,920
			事務局年次大会出張費	80,000	65,840
			その他		
			優良納入者会費払い戻し	29,000	29,000
			機関誌保管料	52,000	55,999
			日本心理学諸学会連合会費	15,000	30,000
			アルバイト・謝礼費	150,000	66,500
			日本学会会議心研連会費		10,000
			予備費	1,529,559	0
			雑費	60,000	11,990
			次年度繰越金		3,805,527
合計	7,702,959	8,373,511	合計	7,702,959	8,373,511

特別会計1 (学会20周年記念事業積立)

収入の部			支出の部		
科目	予算額	決算額	科目	予算額	決算額
前年度繰越金	569,601	569,601	一般会計へ	569,601	569,601
合計	569,601	569,601	合計	569,601	569,601

特別会計2 (若手研究者ABA派遣基金)

収入の部			支出の部		
科目	予算額	決算額	科目	予算額	決算額
前年度繰越金	509,418	509,418	若手研究者ABA派遣費	150,000	150,000
			次年度繰越金	359,418	359,418
合計	509,418	509,418	合計	509,418	509,418

日本行動分析学会 2004 年度予算案

一般会計			一般会計		
収入の部			支出の部		
科目	予算額	(内訳)	科目	予算額	(内訳)
前年度繰越金	3,805,527		事務局関連費	894,000	
今年度会費			事務局員給料		360,000
正会員	3,705,900		消耗品費		150,000
一般		2,963,100	通信費		200,000
学生会員		380,800	会費納入案内郵送費		50,000
夫婦会員		32,000	事務局アルバイト代		134,000
購読会員		320,000	刊行物関連費	3,012,000	
賛助会員		10,000	学会誌印刷費		2,250,000
次年度会費	1,600,000		学会誌郵送費		170,000
過年度会費	167,500		編集作業費		150,000
正会員			英文校閲費		160,000
一般		132,300	ニューズレター印刷費		50,000
学生会員		19,200	ニューズレター郵送費		216,000
夫婦会員		8,000	ニューズレター発送アルバイト代		16,000
購読会員		8,000	学会事業補助費	670,000	
学会誌販売	50,000		公開講座補助費		300,000
			2004年度大会補助費		200,000
			学会賞賞金		100,000
			学会賞関連郵送費		20,000
			学会賞関連印刷費		50,000
			会議費	420,000	
			年次大会会議費		30,000
			その他の会議費		80,000
			常任理事旅費		300,000
			事務局年次大会出張費		10,000
			その他	129,000	
			優良納入者会費払い戻し		29,000
			機関誌保管料		60,000
			日本心理学諸学会連合会費		30,000
			日本学会会議心研連合会費		10,000
			予備費	4,173,927	
			雑費	30,000	
合計	9,328,927		合計	9,328,927	

特別会計(学生会員ABA派遣基金)

収入の部		支出の部	
科目	予算額	科目	予算額
前年度繰越金	359,418	学生会員ABA派遣費	150,000
		予備費	209,418
合計	359,418	合計	359,418

第2回日本在住学生会員のABA参加に対する助成事業

国際担当常任理事 杉山 尚子

5月28日から6月1日の5日間、米国はボストンで国際行動分析学会（ABA）第30回年次大会が開催された。30回記念、スキナー生誕100年、屈指の観光地であり学問の都であるボストンという条件が重なり、参加者総数は世界30カ国から実に3817名。大会開催時のABA会員数は4490名であるから、会員の85%が参加するという凄い大会である。もちろん今年も新記録を塗り替えた。私をはじめ参加した第10回ナッシュビル大会では、会員約2500名、参加者およそ1800名と当時の会長Ellen P. Reeseから伺った。この数字は1998年ごろまでは大きく変動しなかったようである。その頃は、会場のホテル（ABAはホテルを借りて行なわれるので、そのホテルに宿泊すれば職住接近で快適な生活が送れる）は4月に入ってから宿泊予約しても十分間にあったのであるが、今年などは2月にはすでに満室、事務局はあぶれた会員のために近隣のホテルを次々と確保せざるをえなくなり、今回は最終的に5つのホテルを借りるはめになったそうだ。参加者が20年前より2000名も増えたのだから無理もないことである。

会員数や参加者が増えたのはもちろん、世界中に行動分析家が増えている証左でありすばらしいことである。特に本家米国以外の国からの会員と参加者は確実に増えている。Malott (2004)によれば、1998年から2003年にかけて米国内の会員数の増加率は53%であるのに対し、米国以外では118%である。もちろん、わが国もそれに大いに寄与している。図1は1978年に、本会初代会長の山口薫先生をはじめお一人でABAに参加されて以来の、わが国からの参加者総数を示したものである。総数が着実に増加しているが、学生会員の参加者が1999年から急増し、一般会員の参加数を凌駕したことがわかる

だろう（ABA全体では今年の学生の参加割合は35.3%）。これは、ひとつには、米国の大学や大学院に在籍する日本人学生が増えたこと（本年度は9名。地の利を得て彼らは毎年参加する）に起因しているが、日本からの参加者も着実に増えている。世界でも日本でも1998-99年ごろに大きな変化があったことは面白い。今後の分析が必要だろう。

このような状況の中で、本会が学生会員のABAへの参加助成のスカラーシップを開始したのは誠にタイムリーであったといえる。日本経済は失速中とは言え、以前に比べれば遥かに強い円のおかげで参加費用は格段に軽減された（20年前に私をはじめ参加した時は親に70万円を用意してもらったが、いまなら20-25万円で何とかなる）。しかし、それでも負担は負担である。昨年の第1回授与者からも、本年の第2回授与者からも、「この助成金がなければ参加することは考えられなかった」と言う声が聞けたことをご報告し、基金を支えて下さっている会員の皆さまへの感謝の辞としたい。

最後に、今年度助成金を授与された加藤明子さん（上智大学大学院）、松井進さん（常磐大学大学院）に報告記を寄稿していただいた。来年のABAは2005年5月27日～31日までシカゴで開催される。今年度の助成金の申込締切も10月末を予定している。今年はあなたも応募しよう！

<引用文献>

Malott, M. E. (2004). Toward the globalization of behavior analysis. *The Behavior Analyst*, 27, 25-32.

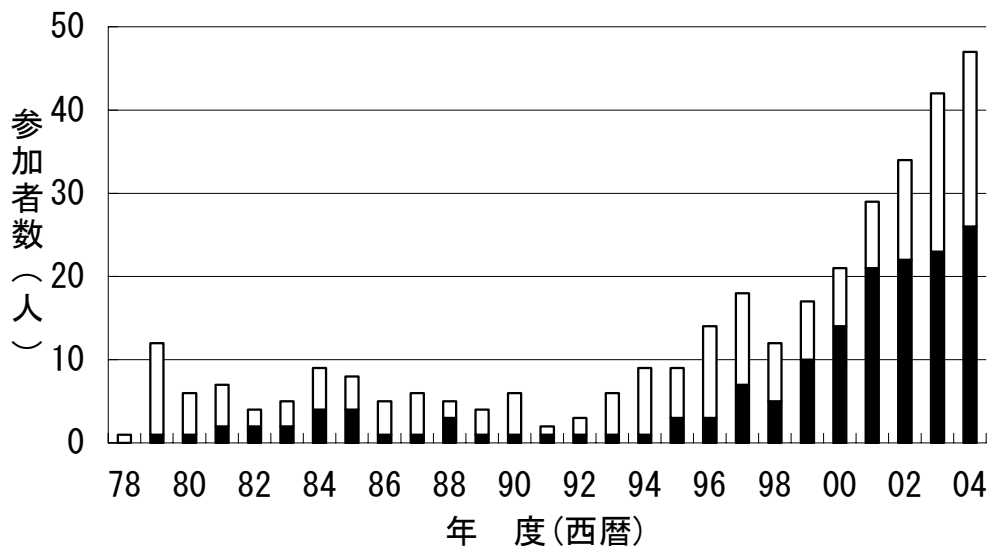


図 1 . ABA年次大会への日本人参加者数。黒いバーは学生会員。白いバーは一般会員。

ABAに参加して(1)

スキナー生誕 100 周年記念大会で発表する

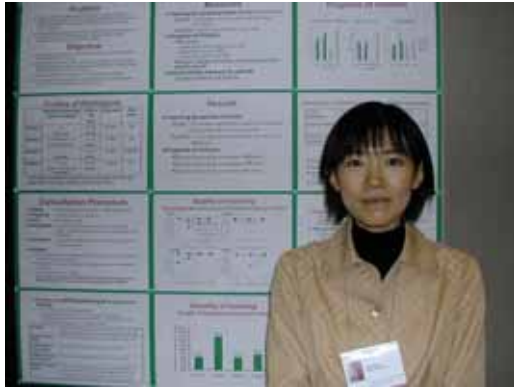
加藤 明子 (上智大学大学院聴講生)

国際行動分析学会の第 30 回年次大会は、2004 年 5 月 28 日から 6 月 1 日までシェラトン・ポストン・ホテルで開かれた。私たち(加藤明子、宮崎麻衣子、中野良顯)は、“An analysis of the effects of behavioral consultation with parents of young children with autism on their teaching behavior and their children s test scores” というポスターを発表した。

発表は長期プロジェクトである。申し込みは 7 ヶ月前の 2003 年 10 月に行った。私が英文タイトルと抄録の草稿を作り宮崎さんと文章を検討した。中野先生にそれらを添削していただいて完成させ、締め切り間際にメールで申し込んだ。申し込みの受領はすぐメールで知らされた

が、採用されたかどうかは 2004 年 1 月になっても一向に知らされなかった。そうこうしているうちに、学会のプログラムがインターネットで公開され、そこで発表できることを確かめて、やっと安堵の胸をなでおろした。

ポスターづくりは、大会 1 ヶ月前から始めた。これまでの研究室の発表経験を踏まえて、ポスターは B4 用紙 13 枚で作ることにした。まず私が日本語による草案を作った。宮崎さん、助手の山本さんとそれを修正し、その日本語版をもとに英文ポスターを試作した。再び、宮崎さん、山本さんと 3 人でそれを検討し、一応完成させて中野先生にお渡しして校閲をお願いした。このとき学会はすでに 1 週間後に迫っていて、研究室ではシンポジウムや通訳の準備もしなければ



ばならず、てんやわんやの大騒ぎだった。先生は私たちのポスターの添削をして下さっただけでなく、ネイティブ・スピーカーのクスマノ教授に英文の最終チェックをお願いして下さり、立派な完成原稿に仕上げして下さいました。

先生から完成版をいただいたのは5月27日、出発の前日だった。大急ぎでフォントに色をつけ、カラー・プリンターでB4サイズに印刷し、それを台紙に貼りこんだ。完成したのはその日の夜9時過ぎだった。別にハンドアウトも100部印刷して、やっとのことで準備を完了することができた。

私たちのセッションは大会3日目の12時から1時半までだった。10時ごろ会場に行き、上智大から参加した11人の仲間とともにポスター12枚とタイトル1枚を貼り付けた。先生はポスター・セッション当日、午前9時から国際学会・ペーパーセッションの座長と通訳があり、また12時半からはUCLAプロジェクトのマルチサイト国際会議があって非常にご多忙だったが、会議開始ぎりぎりまでポスター会場にとどまって、見学者の質問に対応してくださいました。先生が去られた後は、宮崎さんと二人で多

くの見学者に対応した。丁寧にポスターを読んでもくれた人、励ましの言葉を述べてくれた人がたくさんいて、とてもうれしかった。声をかけてくれた人の多くが自閉症児の教育に携わっている人たちだった。自閉症の子どもを持つ日本人家族に渡したいので日本語のハンドアウトはないかとたずねてきた人もいた。日本語のハンドアウトは当日持参して行かなかったので後ほどメールで送ると約束した。

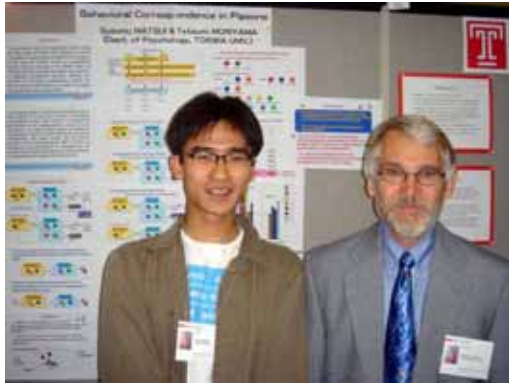
私のABA参加は今年で5回目である。今回は30カ国がおよそ3,800人もの人々が参加したという。国内では類のない大規模な大会であり、参加者の格好もさまざまで、老若男女、中には小さなお子さんを連れた参加者もいる。参加証をつけていなければ、観光客とほとんど見分けがつかない。これらの多様な人々が「行動分析」という共通のキーワードで結ばれ、一箇所に集まってきたかと思うと、とても感慨深かった。

大会中は時差ボケとの戦いである。すべてに参加しようとする朝が晩までスケジュールで一杯になる。それにホテルの周辺には、チャールズ川に架かるハーバード橋、ボストン美術館、ボストンコモンなど観光意欲をそそるものばかりである。プログラムを読むべきか、観光ガイドブックを読むべきかという葛藤に悩まされた。今年は大会で初めて発表できたこと、尊敬するロヴァス先生がアワードをいただいたこと、ABAソーシャルでスキナー生誕100周年を祝うスライドを見ることができたことなど、私にとってとても思い出深い特別の大会になった。助成金によってこのような貴重な経験を可能にしてくださいました日本行動分析学会に心からお礼申し上げます。

ABAに参加して(2)

ABA 体験記

松井 進 (常磐大学大学院博士課程3年)



真新しく真っ白ではあるが、まだ馴染むことのない枕から頭を上げたのは午前 3 時を過ぎた頃であった。しっくりしない枕や自分の発表を翌日に控えた緊張感のため、早朝に目覚めてしまうことは日本の学会に参加したときにもよくあることである。いつものように目覚めの一服でもしようと、エレベーターでロビーに向かっている途中、見知らぬ白人男性が話しかけてきた。片言ではあったが、少しばかりテンションの高い英会話と力強い握手を交わした後に、「よくあることではないなあ」と思いながら、自分が海外にいることを実感した。この出来事から数時間後に、私にとって初めての ABA が始まった。

今年の ABA で、私は言行一致の生起に関わる変数について動物実験で調べた結果を "Behavioral Correspondence in Pigeons" と題するポスターで発表した。この研究は *Journal of Applied Behavior Analysis* に掲載された Lattal and Doepke (2001) に基づき、彼らの研究で報告された訓練手続きの信頼性の検討に加え、言行一致の般化に焦点を当てて行われたものである。発表原稿や和英辞書などを備えて聞きに来てくれる人を待っていると、杉山尚子先生がお見えになった。自分の研究についての説明を終えた後で、Lattal 先生をご紹介していただくことになり、驚きと喜びを感じた。また、Lattal 先生が私の発表を聞くつもりで発

表会場にお見えになったことを後で知り、発表申し込みをする際に提出した発表要旨で先行研究について触れて良かったと思った。しばらくして、Lattal 先生がお見えになり、自己紹介の後で研究の説明をした。説明の途中で予想外の質問を受けたときには、ジェスチャーを交えたり関連する図を指し示したりすることで、自分の考えを理解して頂けたみたいであったが、これに甘えることなく、英語力の更なる向上に努めていきたいと思った。掲載の写真はポスターの前で Lattal 先生と撮影したものである。今回の発表を通して、刺激般化や行動履歴の問題など、様々な人から今後の研究につながる貴重なご意見を賜り、良い経験をしたと思う。

他人の発表に関して、私は言葉が聞き手の行動に及ぼす影響について研究しているので、主に言語行動やルール支配行動、スケジュール感受性に関する発表を聴講した。ABA に参加した当初は、発表者の話していることがよく聞き取れず、理解できないことが多かったが、英語に触れる機会が増えるうちに徐々に理解できるようになり、発表を聞くことが面白くなった。特に、スケジュール感受性に関する発表では、今年の日本行動分析学会においてそのテーマで発表することもあって大変興味深く、勉強になった。今回は英語の問題があり、話を聞いて理解するというよりもスライドを見て理解することが多く、詳細な事まで理解できなかったため、今度 ABA に参加するときには聞き取りの勉強をして相手の話をより深く理解できるようになりたい。

自分や他人の発表以外に、ABA に参加して印象に残った事と言えば、人との出会いである。今回の参加で、日本の大学や海外の大学で活躍されている方々と交流を持ち、研究やそれ以外の事について様々な話をすることができた。喫煙所で知り合った海外の大学院生たちと朝までお酒を飲んで楽しい時間を過ごしたときには、

コミュニケーション力も大切であることを実感した。

日本に帰国し、古びていて多少の汚れはあるが、既に馴染んでいる枕の上で ABA での体験を想起すると、初めての ABA で、初めて発表し、初対面の人と多く知り合えて、とても良い経験をしたと思う。今後、ABA での経験を活かし、研究や英語力などを更に深めていきたい。

最後に、今回、このような貴重な経験ができたのは、様々な人のお力、および J-ABA の助成のおかげであると思う。杉山尚子先生にはポスター発表の際に Lattal 先生をご紹介して頂いた。また、森山哲美先生にはポスター作成や ABA への参加にあたり、多くのご助言を頂いた。この場をお借りして、感謝の意を表したい。ありがとうございました。

行動分析学会第22回年次大会準備委員会より

第22回年次大会準備委員会委員長 佐藤 方哉

年次大会速報

今年の日本行動分析学会年次大会は、帝京大学で開催されます。第 22 回年次大会の見どころ・聴きどころについて、佐藤方哉実行委員長に、インタビュー形式で紹介して戴きましょう。

大会は3日（金曜）夕方から始まります！

Q: まず、今年の大会の特徴をお聞かせ下さい。
佐藤: その前に、会員の皆様にぜひお伝えしておかなければいけないことが幾つかあります。まず、会期が9月3日（金曜）から5日（日曜）の二日半に変更になりました。これは、自主企画シンポジウムのお申し込みが多く、その一部を公開として、3日（金曜）の夕方に開催することにしたためです。嬉しいことに、もう会期が二日間では短すぎるということです。

Q: 一般の参加者も3日から参加できるのですか？

佐藤: もちろんです。是非、大勢の方に参加して戴きたいと思います。3日（金曜）は夕方4時から受付を開始します。

お弁当の予約をお勧めします

佐藤: もうひとつ大切なお願いがあります。大会会場の帝京大学の周辺には、簡単に食事に行ける店がありません。お弁当の予約販売することに致しましたので、是非、御利用下さい。Q: お弁当の予約は、どうすればよろしんでしょうか？

佐藤: 大会論文集を郵送するとき、FAX 申込書を同封致しますので、それをお願い致します。

招待講演者を囲む夕食会を企画しました

Q: 他に大切なお知らせは、ありますか？

佐藤: 招待講演者を囲む夕食会を5日（日曜）に企画しました。若い方々を中心に、積極的に参加して戴けたらと思います。

Q: 夕食会、というのは、懇親会とは違うのですね？

佐藤: はい、懇親会とは別の企画です。ABA（国際行動分析学会）には、“Conversation Hour” といって、著明な行動分析家と学生達が気軽に話を交わすための催しがあります。今回、それに似たものを企画してみたわけです。特に海外からおいで戴く、リチャード・アルビン博士とエドワード・モリス博士のお二人とは、会場で

はなかなか話しをする機会がないと思います。お二人とも、日本の行動分析家と知り合えることを楽しみにしていらっしゃると思います。

Q: 米国での行動分析学の最先端の話題や、今後の展望など、講演や論文などからは伝わってこない情報が得られそうですね？ それに、米国留学を考えている人にとっても、貴重な機会になりそうです。

佐藤: その通りです。夕食会は 5 日ですから 4 日中に受付で申し込みを済ませて下さい。会場は、大学近くのレストランを予定しています。

公開講座、シンポジウム、特別講演... 盛り沢山の企画です

佐藤: 今年の大会は、招待講演 2 件、公開シンポジウム 1 件、シンポジウム 3 件、ワークショップ 1 件、その他にも、理事長企画特別講演と、行動分析家の資格問題を考える集まりがあります。

Q: 「理事長企画特別講演」というのは、初めて聞く催しのように思いますが、簡単に御説明戴けますか。

佐藤: ABA には Presidential Scholar s Address というのがありますが、それにあたるものです。中野理事長の御提言を受けて、順天堂大学の北澤先生に御講演をお願いしました。強化という現象を、中脳のドーパミンニューロンの活動と関係づけた御研究を御紹介戴く予定です。

Q: 招待講演のお二人からは、どんなお話をうかがえるのでしょうか？

佐藤: アルビン博士は、オレゴン大学で障害児教育と、教育・コミュニティ支援に活躍されています。今回の講演では、機能的アセスメントについて、今迄の研究の展望と問題 --- 特に現場で、この手続きを実施する場合の具体的な問題についての指摘と、その答えを論じて戴けることになっています。モリス博士は、基礎行動

分析から、教育、幼児発達、行動分析学の歴史・哲学と、広い研究範囲をお持ちで、現在カンザス大学で御活躍です。国際行動分析学会の会長も務められました。今回は、21 世紀の行動分析学のあり方について語って戴きます。

Q: どちらも大変、魅力的な講演のようですが、英語での御講演ですね...

佐藤: はい、特に同時通訳をすることは致しませんが、おふた方には、ゆっくりと分かりやすい英語でお話し戴くようお願いしてあります。大切な点は、スライドでも示して戴けると思っています。

Q: 資格問題については、最近、行動分析学メーリングリスト (bml) でも議論されていましたが。

佐藤: これは、兵庫教育大学の藤田先生の御提案によるもので、日本における行動分析学の専門家としての資格をどのように考えるべきか、自由な討論の場として活用して戴ければと思います。

懇親会は『多摩ビール』飲み放題! ?

Q: ありがとうございます。最後に、懇親会についてお教え下さい。帝京大学の近くに『多摩ビール』という美味しい地ビールを作っているビア・レストランがあると聞いていたのですが... てっきり懇親会の会場は、そのお店だと思っていたら、大学の食堂ですか？

佐藤: ほんとうは『多摩ビール』を会場にしたかったのですが、100 人程しか収容できないと言われてしまいました。そこで、会場は大学の食堂を借り、『多摩ビール』さんには、出張サービスをお願いすることにしました。

Q: ということは、八王子の地ビール『多摩ビール』飲み放題! ということでですね。どうもありがとうございました。

学会情報

常任理事会ヘッドライン

理事長 中野 良顯

1. 2004 年度常任理事会

今年度の常任理事会は、上智大学において 4 月 11 日(日)と 7 月 4 日(日)の 2 回、開催されました。

2. 常任理事の交代

公開講座企画担当の望月 昭 常任理事から、ご家族の介護のため、十分な仕事ができないので常任理事を辞退したいという申し出がありました。常任理事会に謀った結果、代わりに小野 浩一理事にお願いしたいという結論を得たので、理事長からその旨お話しして、先生から快諾をいただきました。会員の皆様にご報告申し上げます。小野先生には公開講座企画担当として 7 月 4 日の第 2 回常任理事会からご出席いただきました。

望月 昭先生、お忙しいところこれまで常任理事としてお骨折り下さり、ありがとうございます。小野 浩一先生、サバチカル後のご多忙のなかご無理なお願いで恐縮ですが、どうぞよろしく願います。

3. 会員数

会員は年度当初の 630 人台から、7 月 4 日現在で 658 名(一般 514 名、夫婦 8 名、学生 133 名、購読会員 2 名、賛助会員 1 名)に増加しました。

4. 2004 年度会費納入のご案内

2004 年度の会費納入率は 7 月 1 日現在、65.8%となっております。学会の運営は、皆様の会費によって行われています。また年次大会での発表のお申し込みは、会費納入を前提条件

としております。まだ今年度の会費を納入されていない方は、下記まで至急お振り込み下さるよう重ねてお願い申し上げます(一般会員 7000 円、学生会員 4000 円)。

なお、学生会員の方は、科目等履修生/聴講生/社会人学生であることを示す今年度の在学証明書/学生証のコピーを学会事務局宛てに郵送か FAX でお送りください。

郵便局: 00120-2-352016 日本行動分析学会

5. 機関誌の発行

大変お待たせしました。『行動分析学研究』第 18 巻第 2 号が 6 月末に刷り上り、発送させていただきました。皆様のお手許に届きましたでしょうか。2004 年度発行予定の第 19 巻第 1 号は「倫理問題特集号」、第 19 巻第 2 号は、一般論文を中心にした号を予定しており、編集作業が進められております。引き続き、皆様からのご投稿を心からお待ち申し上げます。

6. 学会主催夏期公開講座(研修会)のお知らせ

2004 年 8 月 17 日(火)に、大阪市天王寺区のアウィーナ大阪において、日本行動分析学会主催の夏期公開講座を開催いたします。テーマは「『特別支援教育』を支援する: その具体的な方法」です。午前 9 時 30 分から 17 時まで行われます。

講師としてはオハイオ州立大学から、ウィリアム・ヒューワード教授、甲西町民生部福祉課発達支援室参事の藤井茂樹先生、川西市立川西養護学校教諭の根本正巳先生お招きしております。プログラムは次の通りです。学校現場にお

ける特別支援教育の問題に対する最新の指導法のノウハウを提供する充実した夏期講座になることを願っております。ご支援とご参加とご協力を賜りますようお願い申し上げます。皆様お誘い合わせの上どうぞ奮ってご参加くださいませ。

お申し込みは、葉書または FAX で、お名前・ご住所・電話番号・勤務先・勤務先電話番号・メールアドレスを明記の上、下記までお送りください。

〒673-1494 兵庫県加東郡下久米 942-1 兵庫教育大学教育臨床講座 藤田継道研究室宛
FAX: 0795 - 44 - 2102 藤田継道研究室

7. 年次大会の開催

9月3, 4, 5日、帝京大学において、第22回日本行動分析学会年次大会（実行委員長佐藤方哉帝京大学教授）が開催されます。会員の皆様のご参加をお待ち申し上げております。

8. 住所変更・お問い合わせ

学会事務局では、新入会員のお申し込みや会員の皆様の住所・連絡先変更などのご連絡を、電子メールか FAX でお受けいたしております。メールは、yoshia-n@sophia.ac.jp、FAX は、03-3238-3658 まで、お気軽にご連絡ください。

2004年8月17日(火)

9:00	受付開始
9:30-10:30	「通常の学校におけるLD, ADHD, 高機能自閉症の子どもへの特別支援教育」 講師 上智大学教授 中野 良顯
10:40-12:10	通常の学級に在席するLD, ADHD, 高機能自閉症児の学業成績を伸ばす"研究で実証された"5つの指導法 講師 オハイオ州立大学教授 W・ヒューワード 通訳 上智大学教授 中野 良顯
12:10-13:10	昼食
13:10-14:40	「ADHD、高機能自閉症児の特別支援教育を支える具体的方法：離席・飛び出し・ちょっかい・私語・パニック・暴力への対応課題（勉強）従事行動の増強法」 講師 兵庫教育大学教授 藤田 継道
14:45-15:55	「LD児の具体的指導法（テレビで紹介された支援法：）」 講師 甲西町（滋賀県）民生部福祉課発達支援室 参事 藤井 茂樹
16:00-17:00	通常の学級に在席するLD、ADHD、高機能自閉症児の指導に困っている担任の支援：豊富な具体的実践例の紹介」 講師 兵庫県立川西養護学校教諭 橋本 正巳

研修会のお知らせ

「特別支援教育」を支援する：その具体的な方法

研修会準備委員長 藤田 継道

日本行動分析学会では、今年度の公開講座として、標記の研修会を開催することとなりました。詳しくは同封の案内書をご覧ください。申し

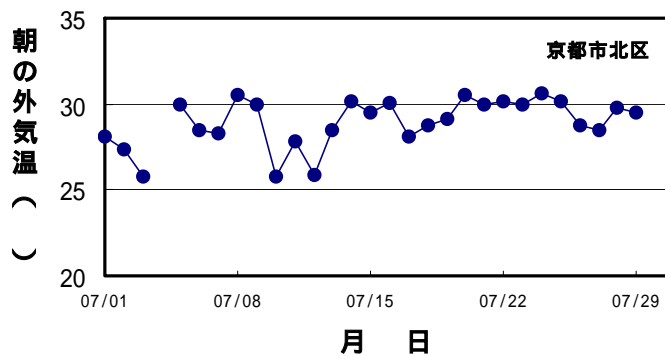
込みの締め切り(8月10日)が迫っておりますので、参加ご希望の方は、お早めに手続きをお済ませ下さい。

編集後記

暑中お見舞い申し上げます。遅ればせながら、ニューズレター35号をお送り致します。今回もまた遅配となってしまい、会員の皆様と投稿して下さった会員の方々には申し訳なく思っております。今夏は、京都も例年に無い猛暑ですが、会員の皆様は、如何お過ごしでしょうか。毎朝毎日、研究室の窓を開けては寒暖計の温度

を見るそれだけで、その日の暑さが思いやられます。

今号の記事にもありましたように、公開講座(研修会)と第22回年次大会が迫っております。多くの会員の皆様が参加されますよう申し上げる次第です。(藤)



J - A B A ニュース編集部より

書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人情報、イベントや企画の案内など、さまざまな記事を募集しています。原稿はテキストファイル形式で電子メールかフロッピー(DOS)で、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。なお、ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属します。掲載された記事は、日本行動分析学会ホームページでの公開を原則としていますので、ホー

ムページ上での公開を望まない事項(例えば、電子メールアドレスなど)のある場合には、あわせてニューズレター編集部までご連絡下さい。

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学文学部心理学研究室気付

日本行動分析学会ニューズレター編集部

藤 健一

(e-mail: fuji@lt.ritsumei.ac.jp

電話 075-466-3193)

ABA が ア ジ ア に 来 る !!

ABA 北京大会



会期：2005年11月25日～27日

会場：嘉里中心飯店

大会参加費：\$360（昼食・バンケット付き）

宿泊費：\$120／室

発表申込：2004年9月に案内開始

発表申込締切：2005年1月